

201015016B

厚生労働科学研究費補助金

医療技術実用化総合研究事業

「消化器外科手術における合成吸収糸使用の手術部位感染抑制効果
に関する多施設共同並行群間無作為比較試験」

平成20年度～22年度 総合研究報告書

研究代表者 前原 喜彦

平成23(2011)年 4月

目次

I. 総合研究報告 消化器外科手術における合成吸収糸使用の手術部位感染抑制効果に関する 多施設共同並行群間無作為化比較試験 前原 喜彦	1
II. 研究成果の刊行に関する一覧表	9
III. 研究成果の刊行物・別刷	15
IV. 参考資料	135

I 総合研究報告

厚生労働省科学研究費補助金（医療技術実用化総合研究事業）
（総合）研究報告書

消化器外科手術における合成吸収系使用の手術部位感染抑制効果に関する
多施設共同並行群間無作為化比較試験

研究代表者 前原喜彦 九州大学大学院医学研究院
消化器・総合外科 教授

研究要旨 皮下・腹壁縫合系については、欧米において絹糸と合成吸収系の無作為化臨床試験とメタアナリシスで、合成吸収系の有効性が確立しているが、腹腔内で合成吸収系を使用することで手術部位感染(Surgical Site Infection : SSI)が減少するというエビデンスは確立していない。本臨床試験の目的は、以下の点である。推奨されている周術期の患者管理を行い、消化器手術の腹腔内での絹糸使用群と合成吸収系使用群のSSI発生率を比較し、合成吸収系使用の有効性を検討する。これまでに、上部消化管、下部消化管、肝、膵の臓器別に吸収糸群、非吸収糸群の目標症例数を設定し、2年間の症例登録期間を経てSSI発生率を比較する。effect size（2群間の治療効果の差）を推定し、将来の大規模臨床第Ⅲ相試験を実施するためにランダム化臨床第Ⅱ相試験を行う。主要評価項目を手術部位感染(SSI)の総発生率とし、副次評価項目は部位別(表層、深部、臓器体腔)感染発生率、SSI発生後治癒確認までの日数、術後在院日数とする。胃切除術270例、大腸切除術270例、肝切除術320例、膵頭十二指腸切除術290例、合計1150例を設定し、2年間の症例登録期間を経てSSI発生率を比較する無作為化臨床第Ⅱ相試験を行う。試験プロトコルの作成の中で、症例の選択基準、除外基準、SSI防止に関する予防策の統一など、試験結果の精度に関する議論を十分に重ねてきた。生物統計家により登録症例数設計を行い、胃切除術270例、大腸切除術270例、肝切除術320例、膵頭十二指腸切除術290例、合計1150例を計画した。インターネットを利用した登録システムであるEDCシステムを準備し、平成21年2月16日より症例登録を開始した。平成23年3月31日現在、胃：271例、大腸271例、肝臓：337例、膵臓：295例、合計1174例が登録された。主要評価項目であるSSI発生割合は、合成吸収糸群/絹糸群で、胃：14.2%/8.3% (p=0.1314)、大腸：17.6%/13.5% (p=0.4031)、肝：12.9%/9.8% (p=0.3774)、膵臓：41.4%/32.4% (p=0.1145)とすべての臓器において有意差は無いが、合成吸収糸群のSSI発生割合が高かった。「胃」「大腸」「肝臓」「膵」の4臓器において示された結果は、従来の考え方である「合成吸収糸を用いることが絹糸を用いるよりSSIの発生を軽減できる」との仮説と正反対の結果であった。「今回用いられた合成吸収糸Vicrylでは絹糸よりもSSIの発生を軽減できる」とは言えない。絹糸に比較して、コストのかかる合成吸収糸VicrylのSSI発生に係る優位性を保証する根拠は否定され、このことは、無制限な医療費の増大を抑制する結果につながると考えられた。

研究分担者氏名及び所属施設
研究者氏名

前原 喜彦	九州大学 教授	消化器・総合外科	國土 典宏	東京大学 教授	肝胆膵・移植外科
土岐祐一郎	大阪大学 教授	消化器外科	小林 道也	高知大学 教授	医療管理学
掛地 吉弘	九州大学 准教授	消化器・総合外科	澤 芳樹	大阪大学 教授	心臓血管・呼吸器外科
鴻江 俊治	九州大学 教授	外科分子治療学講座	高山 忠利	日本大学 教授	消化器外科
武富 紹信	九州大学 助教	消化器・総合外科	夏越 祥次	鹿児島大学 教授	消化器外科

馬場 秀夫	熊本大学	消化器外科
	教授	
黒木 保	長崎大学	移植・消化器外科学
	講師	
吉田 和弘	岐阜大学	腫瘍外科
	教授	
赤澤 宏平	新潟大学	医療情報部
	教授	
竹内 正弘	北里大学	臨床統計部門
	教授	
山中 竹春	九州がんセンター	臨床研究部
	室長	
山本 雅一	東京女子医科大学	消化器外科
	教授	
上坂 克彦	静岡県立静岡がんセンター	肝胆膵外科 部長
上本 伸二	京都大学	肝胆膵・移植外科
	教授	
山上 裕機	和歌山県立医科大学	外科学第2講座 教授
島田 光生	徳島大学	消化器・移植外科学
	教授	
寺島 雅典	静岡県立静岡がんセンター	胃外科 部長
江見 泰徳	九州大学	消化器・総合外科
	特任准教授	
小菅 智男	国立がんセンター中央病院	肝胆膵外科 副院長

A. 研究目的

欧米先進諸国では、消化器手術において手術用絹糸は使用されなくなっている。これは、合成吸収糸が発売された当初、多くの動物実験と臨床試験において絹糸と合成吸収糸の比較試験が行われ、皮下、腹壁縫合における合成吸収糸の有効性が証明された結果である。米国CDC(Center for disease control and prevention)の手術部位感染(SSI)防止ガイドライン中に多くの参照文献として掲載されており、ガイドラインの本文には、絹糸の存在下では感染の危険性が増加すると記載されている。手術創に絹糸が存在すると、細菌が付着しやすく感染を助長する(Elek et al., Br J Exp Pathol 1957)。一方わが国では、依然として手術用絹糸が広く使用されている。皮下・腹壁縫合については、欧米において絹糸と合成吸収糸の無作為化臨床試験とメタアナリシスで、合成吸収糸の有効性が確立している(Weilland et al, Am J Surg 1998; Riet, et al, Br J Surg 2001)が、腹腔内で合成吸収糸を使用することで手術部位感染(SSI)が減少するというエビデンスは確立していない。本臨床試験の目的は、以下の2点である。

1) CDCにより推奨されている周術期の患者管理を行い、消化器手術の腹腔内での絹糸使用群と全合成吸収糸使用群のSSI発生率を比較し、合成吸収糸使用の有効性を検討する。

2) 腹腔内感染発症例において、絹糸使用群と合成吸収糸使用群の治癒期間について比較検討する。

これまでに、九州大学第二外科にて腹腔内での結紮・縫合糸に関する調査を盛り込むSSIサーベイランス(総数903例)がプロスペクティブに施行され、特に大腸手術(386例)において吸収糸群のSSIが絹糸群に比べて有意に低率であったと報告し(吸収糸群13.9%、絹糸群22.4% P=0.03)、吸収糸の有用性を示唆している(Watanabe et al, Surgery Today, 2008)。しかしながら、腹腔内の絹糸使用と合成吸収糸使用における手術部位感染についての臨床比較試験は行われておらず、本臨床試験でエビデンスの創出を図る。絹糸がSSI発生の点で劣っていることを示唆する報告は散見されるが、腹腔内での吸収糸・非吸収糸の使用とSSIに関するmega-RCTは存在せず、どの種類の消化器手術で吸収糸使用がどれくらい有用なのか、本臨床試験で明らかにする意義は大きい。

外科術後感染症で最も多い感染症が手術部位感染(SSI)であり、その発生は患者満足度を低下させるだけでなく入院期間の延長を伴い、医療経済上も大きなマイナスインパクトを与える。本研究は開腹消化器手術における吸収糸の使用が手術部位の感染症発症を抑えるという効果の臨床的エビデンス創出に関する研究である。本研究で手術部位感染症が予防できれば術後の合併症を減らすことが可能となり、消化器手術を受ける国民の医療が安全に行え、在院日数が短縮し、通常の包括医療で済む患者の割合が増す。本臨床試験の結果は、科学的な根拠に基づいた質の高い医療の国民への提供と医療経済の効率化に貢献できると考える。

B. 研究方法

上部消化管、下部消化管、肝、膵の臓器別に吸収糸群、非吸収糸群について目標症例数を設定し、2年間の症例登録期間を経てSSI発生率を比較する。effect size(2群間の治療効果の差)を推定し、将来の大規模臨床第Ⅲ相試験を実施するために臨床第Ⅱ相試験を行う。

「消化管外科手術における合成吸収糸使用の手術部位感染抑制効果に関する多施設共同並行群間無作為化比較試験」

「肝切除および膵頭十二指腸切除における合成吸収糸使用の手術部位感染抑制効果に関する多施設共同並行群間無作為化比較試験」

上記二つの臨床第Ⅱ相試験を行う。

(1) 研究計画および方法

1) 多施設共同並行群間無作為化比較試験

2) 試験材料：滅菌済み手術用絹糸、合成吸収性縫合糸(Polyglactin910, Polydioxanone)

3) 対象疾患：本研究の対象疾患は、以下の通りとする。

胃部分切除術：胃全摘術

合成吸収糸群135例、絹糸群135例

結腸・直腸切除術：

合成吸収糸群135例、絹糸群135例

肝切除手術：

合成吸収糸群160例、絹糸群160例

膵頭十二指腸切除手術：

合成吸収糸群145例、絹糸群145例

割り付け因子

消化管：施設、術式、腹腔鏡補助

肝膵：施設、(肝) 肝硬変の有無

(膵) 糖尿病の有無

4) 周術期管理法を下記の項目について規定する。

術前の患者準備、抗菌薬の予防投与を統一する。

手術手技：筋膜には合成吸収糸を使用し、閉鎖式(吸引)ドレインを用いる。

術後の管理法：手術部位感染が疑われた場合には必ず細菌培養検査を提出する。

5) 評価項目

主要評価項目：手術部位感染(SSI)の総発生率

副次評価項目：部位別(表層、深部、臓器体腔)

感染発生率、SSI発生後治癒確認までの期間術後在院日数

6) 手術部位感染(SSI)の評価基準：CDCによる手術部位感染の定義に準拠

①表層切開部創感染

②深部切開部創感染

③臓器体腔創感染

7) 登録の手順

施設登録及び症例登録は、Webシステムを用い、データセンターにおける中央登録制とする。

8) 症例登録期間：平成21年2月16日～

追跡終了日：最終症例登録の1ヶ月後

全研究期間：2年1ヶ月

(2) 研究体制

研究代表者および研究分担者の施設で対象患者の登録をEDCシステムを用いて登録・データセンターに行う。無作為化割付された術式を行い、決められた術後管理を行い手術部位感染率を比較する。割り付け結果の施行確認を手術室で第三者施行。通常直接介助の看護師を想定する。SSIの判定は、割り付け結果を知らないSSI判定能力のある主治医・術者以外の医療者が行う。(他の外科医、ICTリンクナース、ICTメンバー)

(倫理面への配慮) 本試験に関与するすべての者は「世界医師会ヘルシンキ宣言」、および「臨床研究に関する倫理指針」に従う。

説明文書・同意書(様式)および同意撤回書は試験責任医師が作成する。また、作成した説明文書・同意書(様式)は試験開始前に所属する医療機関の倫理審査委員会に提出し、その承認を得る。試験に携わる関係者は被験者の個人情報保護に最大限の努力をほらう。

データセンターが医療機関へ照会する際の被験者の特定は、試験責任医師および試験分担医師が管理する被験者識別コードまたはデータセンターが発行した登録番号を用いて行う。原資料の直接閲覧を行ったモニタリング担当者、監査担当者、規制当局の担当者などは、そこで得られた情報を外部へ漏洩しない。

主任研究者等が試験で得られた情報を公表する際には、被験者が特定できないよう十分に配慮する。

<プロトコル>

平成20年度の当該研究課題「消化器外科手術における合成吸収糸使用の手術部位感染抑制効果に関する多施設共同並行群間無作為化比較試験」の採択に際して、当研究のプロトコルの細部に関して推敲を重ねてきた。平成20年9月9日に東京で開催された班会議において、研究代表者、研究分担者により具体的なプロトコル内容について審議を行い、最終的には平成20年11月6日にプロトコルが完成した。各研究分担者へ発送し、現在、各研究分担者施設の倫理審査委員会の承認を得た。また審議の過程で、消化管領域の参加施設が11施設、肝・胆・膵領域の参加施設が17施設へと拡大し、より迅速な症例の集積が可能となっ

た。

<症例登録およびデータマネジメント>

上記プロトコルの検討・確定とともに、臨床試験遂行にあたり症例登録・データマネジメントを外部機関に委託することを決定した。データマネジメント部分を研究担当者から切り離し、データの質および信頼性を確保する目的である（品質保証・管理）。イーピーエス株式会社と契約を進め、Webシステム（EDCシステム）による症例登録、データ収集管理構築を鋭意進めている。また、臨床試験のプロトコルは大学病院医療情報ネットワーク（UMIN）「臨床試験登録システム」に登録を行った。

C. 研究結果

上記進捗状況を踏まえて平成21年2月16日から症例登録、試験治療を開始した。平成21年8月研究協力施設を募集し、17施設の参加を得て、順調に登録が進んだ。胃は平成21年11月までに271例、大腸は平成22年5月までに271例、肝臓は平成21年10月までに337例、膵臓は平成22年6月までに295例、合計1174例が登録された。現在、試験観察期間も全症例で終了している。症例報告データを集計し、データマネジメント作業の上、データ固定した。主要評価項目であるSSI発生割合は、合成吸収糸群/絹糸群で、胃：14.2%/8.3% ($p=0.1314$)、大腸：17.6%/13.5% ($p=0.4031$)、肝：12.9%/9.8% ($p=0.3774$)、膵臓：41.4%/32.4% ($p=0.1145$)とすべての臓器において有意差は無いが、合成吸収糸群のSSI発生割合が高かった。

D. 考察

本試験は、腹部手術におけるSSIの発生に関して、腹腔内結紮糸として合成吸収糸を用いることが絹糸を用いるよりSSIの発生を軽減できるとの仮説を検証すべき今後の臨床第3相試験を前提として、無作為化第2相試験として実施された。しかしながら、予想した結果とは反対に、SSI発生割合は合成吸収糸群が絹糸群より有意差はないものの高い値を示した。したがって、本試験の結果は第3相試験を実施することを推奨しない。

E. 結果

「胃」「大腸」「肝臓」「膵」の4臓器において示された結果は、従来の考え方である「合成吸

収糸を用いることが絹糸を用いるよりSSIの発生を軽減できる」との仮説と正反対の結果であった。「今回用いられた合成吸収糸Vicrylでは絹糸よりもSSIの発生を軽減できる」とは言えない。絹糸に比較して、コストのかかる合成吸収糸VicrylのSSI発生に係る優位性を保証する根拠は否定され、このことは、無制限な医療費の増大を抑制する結果につながると考えられた。

F. 健康危険情報

特記すべきことなし。

G. 研究発表

論文発表

1. Watanabe A, Kohnoe S, Shimabukuro R, Yamanaka T, Iso Y, Baba H, Higashi H, Orita H, Emi Y, Takahashi I, Korenaga D, Maehara Y.
Risk factors associated with surgical site infection in upper and lower gastrointestinal surgery.
*Surg Today*38 : 404-412,2008
2. Sato T, Takayama T, Fujii M, Song K, Matsuda M, Higaki T, Okada S.
Systemic use of antibiotics does not prevent postoperative infection in elective colorectal surgery: a randomized controlled trial.
J Infect Chemother. 15:34-38,2009
3. Ueno M, Uchiyama K, Ozawa S, Hayami S, Kiriya S, Yamaue H.
A new prediction model of postoperative complications after major hepatectomy for hepatocellular carcinoma.
*Dig Surg.*26(5):392-399,2009
4. Hashimoto D, Takamori H, Sakamoto Y, Ikuta Y, Nakahara O, Furuhashi S, Tanaka H, Watanabe M, Beppu T, Hirota M, Baba H.
Is an estimation of physiologic ability and surgical stress able to predict operative morbidity after pancreaticoduodenectomy?
J Hepatobiliary Pancreat Sci:17(2):132-8, 2010

5. Kochi M, Fujii M, Kanamori N, Kaiga T, Okubo R, Hagiwara K, Funada T, Tamegai H, **Takayama T**.
Irinotecan plus S-1 for liver metastases of gastric cancer.
Hepatogastroenterology.56: 1755-1759,2009
6. Watanabe Y, **Takayama T**, Yamazaki S, Aramaki O, Moriguchi M, Higaki T, Inoue K, Makuuchi M.
Use of a bridging autologous hepatic vein graft for extended right-liver transplantation.
Transplant International.22: 1193-1194,2009
7. Nakayama H, **Takayama T**, Ohkubo T.
Reconstruction by lateral pancreaticogastrostomy after pancreatoduodenectomy.
The Nihon University Journal of Medicine. 51: 53-58,2009
8. Kawai M, Tani M, Hirono S, Ina S, Miyazawa M, **Yamaue H** :
How do we predict the clinically relevant pancreatic fistula after pancreaticoduodenectomy?—an analysis in 244 consecutive patients.
World J Surg. 33(12): 2670-2678,2009
9. Tani M, Kawai M, Hirono S, Ina S, Miyazawa M, Nishioka R, Shimizu A, Uchiyama K, **Yamaue H**:
A pancreaticoduodenectomy is acceptable for periampullary tumors in the elderly, even in patients over 80 years of age.
J Hepatobiliary Pancreat Surg. 16(5): 675-680,2009
10. Tani M, Kawai M, Hirono S, Ina S, Miyazawa M, Shimizu A, **Yamaue H** :
A prospective randomized controlled trial of internal versus external drainage with pancreaticojejunostomy for pancreaticoduodenectomy.
Am J Surg. 199(6): 759-764,2010
11. Moriguchi M, **Takayama T**, Nakamura M, Aramaki O, Higaki T, Nakayama H, Ohkubo T, Fujii M.
Phase I/II study of a fine-powder formulation of cisplatin for transcatheter arterial chemobolization in hepatocellular carcinoma.
Hepatology Research.40:369-375,2010
12. Yamazaki S, **Takayama T**, Makuuchi M.
The technical advance and impact of caudate lobe venous reconstruction in left liver: additional safety for living-related donor liver transplantation.
Transplant International.23:345-349,2010
13. Fujii M, Kochi M, **Takayama T**.
Recent advances in chemotherapy for advanced gastric cancer in Japan.
Surg Today 40:295-300,2010
14. Kajiwarra T, Sakamoto Y, Morofuji N, Nara S, Esaki M, Shimada K, **Kosuge T**.
An analysis of risk factors for pancreatic fistula after pancreaticoduodenectomy: clinical impact of bile juice infection on day 1.
Langenbecks Arch Surg.395:707-712,2010
15. Hashimoto D, Takamori H, Sakamoto Y, Tanaka H, Hirota M, **Baba H**.
Can the physiologic ability and surgical stress (E-PASS) scoring system predict operative morbidity after distal pancreatectomy?
Surg today 40(7):632-637,2010
16. Uchiyama K, Ueno M, Ozawa S, Kiriyama S, Kawai M, Hirono S, Tani M, **Yamaue H**:
Risk factors for postoperative infectious complications after hepatectomy.
Hepatobiliary Pancreat Sci. 18(1): 67-73,2011
- 17.内山和久、柳瀬安芸、藤内加奈子、小島光江、山上裕機
当院におけるStenotrophomonas maltophiliaの検出状況の特徴について
*日本外科感染症学会雑誌*6(6) : 595-600, 2009
- 18.清水潤三、宮本敦史、梅下浩司、山崎 誠、小林省吾、赤丸裕介、水島恒和、小林哲郎、伊藤嘉記、森 正樹、土岐祐一郎、門田守人
腹腔内操作における縫合糸の選択—多施設共同SSIサーベイランス結果より—
*日本外科感染症学会雑誌*6(4) : 289-292, 2009
19. 辛島龍一、別府 透、近本 亮、石河隆敏、齋藤誠哉、佐藤信隆、増田稔郎、林 尚子、渡邊雅之、馬場秀夫
特集/大腸癌肝転移に対する治療4. 集学的治療
b)術前化学療法併用肝切除
*外科*72(2) : 148-152,2010

Ⅱ 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
	該当なし						

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Watanabe A	Risk Factors Associated with Surgical Site Infection in Upper and Lower Gastrointestinal Surgery.	Surgery Today	38	404-412	2008
Sato T	Systemic use of antibiotics does not prevent postoperative infection in elective colorectal surgery: a randomized controlled trial.	J Infect Chemother	15	34-38	2009
Ueno M	A new prediction model of post-operative complications after major hepatectomy for hepatocellular Carcinoma.	Digestive Surg	26(5)	392-399.	2009
Hashimoto D	Is an estimation of physiologic ability and surgical stress able to predict operative morbidity after pancreaticoduodenectomy?	J Hepatobiliary Pancreat Sci	17(2)	132-138	2010
Kochi M	Irinotecan plus S-1 for liver metastases of gastric cancer.	Hepatogastroenterology.	56	1755-1759	2009
Watanabe Y	Use of a bridging autologous hepatic vein graft for extended right-liver transplantation.	Transplant International	22	1193-1194	2009
Nakayama H	Reconstruction by lateral pancreaticogastrostomy after pancreaticoduodenectomy.	The Nihon University Journal of Medicine	51	53-58	2009

Kawai M	How do we predict the clinically relevant pancreatic fistula after pancreaticoduodenectomy?--an analysis in 244 consecutive patients.	World J Surg.	33(12)	2670-2678	2009
Tani M	A pancreaticoduodenectomy is acceptable for periampullary tumors in the elderly, even in patients over 80 years of age.	J Hepatobiliary Pancreat Surg.	16(5)	675-680	2009
Tani M	A prospective randomized controlled trial of internal versus external drainage with pancreaticojejunostomy for pancreaticoduodenectomy.	Am J Surg.	199(6)	759-764	2010
Moriguchi M	Phase I/II study of a fine-powder formulation of cisplatin for transcatheter arterial chemoembolization in hepatocellular carcinoma.	Hepatology Resarch	40	369-375	2010
Yamazaki S	The technical advance and impact of caudate lobe venous reconstruction in left liver: additional safety for living-related donor liver transplantation.	Transplant International.	23	345-349	2010
Fujii M	Recent advances in chemotherapy for advanced gastric cancer in Japan.	Surgery Today	40	295-300	2010
Kajiwara T	An analysis of risk factors for pancreatic fistula after pancreaticoduodenectomy: clinical impact of bile juice infection on day 1.	Langenbecks Arch Surg	395	707-712	2010
Hashimoto D	Can the physiologic ability and surgical stress (E-PASS) scoring system predict operative morbidity after distal pancreatectomy?	Surgery Today	40(7)	632-637	2010
Uchiyama K	Risk factors for postoperative infectious complications after hepatectomy:	J Hepatobiliary Pancreat Sci.	18(1)	67-73	2011
内山和久	当院における <i>Stenotrophomonas maltophilia</i> の検出状況の特徴について	日本外科感染症学会雑誌	6(6)	595-600	2009

清水潤三	腹腔内操作における縫合糸の選択— 多施設共同SSIサーベイランス結果よ り—	日本外科感染症 学会雑誌	6(4)	289-292	2009
辛島龍一	特集／大腸癌肝転移に対する治療 4. 集学的治療 b) 術前化学療法 併用肝切除.	外科	72(2)		2010

Ⅲ 研究成果の刊行物・別刷

Risk Factors Associated with Surgical Site Infection in Upper and Lower Gastrointestinal Surgery

AKIHIRO WATANABE, SHUNJI KOHNOE, RINSHUN SHIMABUKURO, TAKEHARU YAMANAKA, YASUNORI ISO, HIDEO BABA, HIDEFUMI HIGASHI, HIROYUKI ORITA, YASUNORI EMI, IKUO TAKAHASHI, DAISUKE KORENAGA, and YOSHIHIKO MAEHARA

The Surgical Site Infection Study Group, Department of Surgery and Science, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, Fukuoka, Japan

Abstract

Purpose. To assess the risk factors of surgical site infection (SSI) in gastrointestinal surgery.

Methods. Surgical site infection surveillance was conducted in 27 hospitals.

Results. The incidence of SSI in the 941 patients studied was 15.5%. The factors associated with SSI were body mass index (BMI), comorbidity, emergency procedures, wound classification, blood loss, the suture material used for intra-abdominal ligation, the method of subcutaneous incision, the frequency of glove changes, and the absence of subcutaneous sutures. In lower alimentary tract procedures, additional factors influencing the incidence of SSI were sex, smoking status, operating time, the suture material used for abdominal wound closure and seromuscular sutures, and the combined resection procedures. According to a multiple logistic regression analysis, the independent risk factors for SSI were as follows: the type of operation, blood loss, wound classification, emergency procedures, the frequency of glove changes, the use of subcutaneous sutures, combined resection procedures, and the material used for seromuscular suturing.

Conclusion. Strict asepsis and minimal blood loss were associated with a lower incidence of SSI following gastrointestinal surgery. The use of absorbable suture material may be involved in reducing the risk of SSI.

Key words SSI · Gastrointestinal surgery · Surveillance

Introduction

Surgical site infection (SSI) accounts for about 15% of all nosocomial infections and occurs in 10%–30% of all patients undergoing gastrointestinal surgery.^{1,2} Surgeons either tend to ignore or are unaware of these data because of the minor impact these infections have on postoperative recovery, especially incisional SSIs. Nevertheless, a considerable number of patients suffer from the unexpected and painful complications of an SSI. Thus, surgeons should be made aware of the high incidence and costs of managing SSIs.^{1,3}

In 1970, the Centers for Disease Control and Prevention (CDC) in US set up the National Nosocomial Infection Surveillance (NNIS) system and established the guidelines for the prevention of SSI.⁴ The CDC also reported that surveillance plays an important role in decreasing the incidence of SSI. In 1998, almost 30 years after the NNIS system was established, the Japanese Nosocomial Infection Surveillance (JNIS) system was started.⁵ Most Japanese surgeons now recognize the importance of preventing SSI. We founded the SSI study group in Kyushu University to decrease the rate of SSIs and to investigate the factors influencing it. This report presents our preliminary results of SSI surveillance of gastrointestinal surgery in the Department of Surgery and Science, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, and its 26 affiliated hospitals in the Kyushu, Shikoku, and Chugoku districts. We focused on the operative procedures, including the materials used in abdominal closure, seromuscular suturing, and intra-abdominal ligation.

Methods

Between October 1, 2004 and January 31, 2005, we collected and analyzed data prospectively from patients who underwent operations for gastrointestinal disease

Reprint requests to: A. Watanabe, Department of General Surgery, Fukuoka Dental College Hospital, 2-15-1 Tamura, Sawara-ku, Fukuoka 814-0193, Japan

Received: March 5, 2007 / Accepted: June 26, 2007

in the Department of Surgery and Science, Graduate School of Medical Sciences, Kyushu University, and its 26 affiliated hospitals. The subjects of this study consisted of patients who underwent operations in the intra-abdominal alimentary tract, such as procedures for gastroduodenal, small intestinal, and colorectal diseases, and appendicitis. Patients who underwent esophageal, anal, pancreatic, and biliary tract operations were not included in this surveillance. Records of both elective and emergency procedures were collected preoperatively, intraoperatively, and during 1 month of postoperative follow-up. No recommendations were made prior to or during this study to decrease the incidence of SSI. There was no protocol for the administering of antibiotics, including preoperative preparations for colorectal operations.

The preoperative data, including body weight, height, smoking habits, and the method of hair removal, were collected from responses to a questionnaire given to the patients. The American Society of Anesthesiologists (ASA) score was calculated by the anesthesiology team when requested by the attending physician. The diagnosis and classification of SSI, namely, superficial incisional, deep incisional, or organ/space SSI, and the surgical wound classification, namely, Class I (clean), Class II (clean-contaminated), Class III (contaminated), or Class IV (dirty-infected), were based on the CDC definitions.⁴ Patients with delayed primary sutures were excluded from the superficial SSI assessment. All data were collected by the attending physician or the SSI staff, namely, surgeons who were responsible for data accumulation and SSI evaluation. The data files were sent to the secretary of the SSI study group at the Department of Surgery, Fukuoka Dental College, Fukuoka, Japan.

Univariate statistical analyses were conducted using chi-square tests and unpaired, one-tailed *t* tests. Yates correction was done if there was a number lower than 10 in the chi-square test. Multivariate regression analysis was conducted for gastrectomy, colectomy, rectal resection or amputation, and appendectomy, using a BMDP package program (The BMDP PLR program; BMDP Statistical Software, Los Angeles, CA, USA) for an IBM (IBM, Armonk, NY, USA) 3090 mainframe computer, employing Cox's proportional hazard model⁶ to determine the independent factors for SSI. Stoma operations (including Hartmann's operation), bypass procedures, perforation closure, adhesiolysis, wedge resection, and other miscellaneous procedures were excluded from the analysis. The covariates studied are listed in Tables 4 and 5.

Results

Patient Characteristics

We analyzed 941 patients. Table 1 summarizes the patient characteristics and incidences of SSI. The age distribution was 11–98 years, and 63.7% of the patients were men. The SSI-positive group had a significantly higher mean body mass index (BMI) than the SSI-negative group ($P = 0.046$). Patients with comorbidity had a higher incidence of SSI than those without comorbidity ($P = 0.045$). Within the comorbidity group, patients with chronic lung disease such as asthma had a higher incidence of SSI than those without comorbidity ($P = 0.003$). According to the questionnaire, 28.6% of the patients were smokers, consistent with the current smoking rate in Japan. The group who either quit smoking for less than a month before their operation or were still smoking at the time of their operation had a relatively higher SSI rate (18.4%) than the non-smokers or the patients who had quit smoking for more than a month (14.9%). Hair on the skin over the operative site was either not removed (35.5%) or was removed using clippers or a depilatory agent (52.8%) in majority of patients. Only 29 (3%) patients had the preoperative area shaved, and because of this low percentage, there was no significant difference in SSI rates between shaved patients and those who were not shaved. Regarding the timing of hair removal, 334 (35.5%) patients were prepared on the day prior to surgery, contrary to the current CDC guidelines.⁴

Incidence of SSI According to the Type of Operation

The incidence of SSI following upper alimentary tract operations, which consisted of partial and total gastrectomy, including total resection of the gastric remnant, was 8% (26/326). Conversely, the incidence of SSI following lower alimentary tract operations, which consisted of small-intestinal and colorectal surgery, appendectomy, and stoma operations including Hartmann's operation, was as high as 20%–30% (Table 2).

Operative Variables and SSI

The relationships between operative variables and SSI are summarized in Table 3. The incidence of SSI was significantly associated with such factors as elective or emergency surgery, wound classification, blood loss, the suture material used for intra-abdominal ligation, the method of subcutaneous incision, the frequency of glove changes, and the presence of subcutaneous sutures (Table 3). The incidence of SSI was lower following the procedures in which absorbable sutures were used than the procedures in which non-absorbable sutures were

Table 1. Patient characteristics and surgical site infection

Characteristics	No. of patients	SSI (+) (%)	SSI (-)	P
Age	941	64 ± 17	64.4 ± 17	NS
Sex				
Male	599	103 (17.2)	496	NS
Female	342	43 (12.6)	299	
BMI	923	22.5 ± 3.7	21.8 ± 3.5	0.046
ASA score				
1 and 2	775	113 (14.6)	662	NS
≥3	164	33 (20.1)	131	
Comorbidity				
Absent	542	73 (13.5)	469	0.045
Present	388	71 (18.3)	317	
Diabetes mellitus	113	16 (14.2)	97	NS ^b
Cardiovascular disease	112	21 (18.8)	91	NS ^b
Lung disease	13	6 (46.2)	7	0.003 ^b
Renal failure	18	4 (22.2)	14	NS ^b
Albumin < 3 g/dl	50	9 (18)	41	NS ^b
Hemoglobin < 10 g/dl	79	14 (17.7)	65	NS ^b
Others ^a	117	22 (18.8)	95	NS ^b
Smoking				
None/cessation ≥ a month	747	111 (14.9)	636	NS
Cessation < a month/smoking	185	34 (18.4)	151	
Hair removal				
None	334	47 (14.1)	287	NS
Depilatory agent/clipper	497	76 (15.3)	421	
Razor shaving	29	3 (10.3)	26	

Values are expressed as mean ± SD

SSI, surgical site infection; BMI, body mass index; ASA, American Society of Anesthesiologists; NS, non-significant

^aOthers include liver cirrhosis or chronic hepatitis, steroid usage, infection, and other diseases

^bVersus comorbidity absent cases

Table 2. Type of operation and surgical site infection

Operation	Type of SSI			Total	SSI (%)
	Superficial incisional ^a	Deep incisional	Organ/space		
Gastrectomy: proximal and distal	5 (220)	2 (222)	8 (222)	15 (222)	6.8
Gastrectomy: total and gastric remnant	5 (104)	0 (104)	6 (104)	11 (104)	10.6
Resection: small intestine	4 (33)	1 (35)	2 (35)	7 (35)	20
Resection: colon	35 (235)	6 (238)	9 (238)	50 (238)	21
Resection: rectum	6 (96)	1 (98)	6 (98)	13 (98)	13.3
Rectal amputation and total pelvic exenteration	5 (30)	2 (30)	2 (30)	9 (30)	30
Stoma and Hartmann's operation	9 (36)	0 (38)	1 (38)	10 (38)	26.3
Bypass	4 (19)	0 (20)	1 (20)	5 (20)	25
Closure of perforation	0 (17)	2 (20)	2 (20)	4 (20)	20
Appendectomy	8 (92)	2 (99)	6 (99)	16 (99)	16.2
Adhesiolysis	0 (12)	2 (12)	0 (12)	2 (12)	16.7
Wedge resection	0 (12)	0 (13)	0 (13)	0 (13)	0
Others	3 (12)	1 (12)	0 (12)	4 (12)	33.3

Numbers in parentheses indicate the number of operations

SSI, surgical site infection

^aDelayed primary suture cases were excluded

used for abdominal wound closure and seromuscular suturing, although the difference was not significant. Regarding the drainage type, open drainage was associated with an 18.1% incidence of SSI, which was higher than that associated with other types of drainage. The

association of patient characteristics and operative variables with the incidence of SSI was assessed separately in relation to upper and lower alimentary tract operations because of the differences in the SSI rates (Tables 4, 5). In upper alimentary tract surgery, significant

Table 3. Operative variables and surgical site infection

Operative variable	No. of patients	SSI (+) (%)	SSI (-)	P
Emergency				
Elective	732	94 (12.8)	638	<0.001
Emergency	207	51 (24.6)	156	
Wound classification				
Classes I and II	812	96 (11.8)	716	<0.001
Classes III and IV	129	50 (38.7)	79	
Laparoscopic or assisted surgery				
No	836	133 (15.9)	703	NS
Yes	106	13 (12.3)	93	
Blood loss	941	234 ± 317	415 ± 594	<0.001
Operation time	932	198 ± 109	185 ± 88	NS
Abdominal wound closure				
Intermittent or continuous				
Intermittent	609	93 (15.3)	516	NS
Continuous	330	53 (16.1)	277	
Suture material				
Absorbable	808	119 (14.7)	689	NS
Non-absorbable	131	27 (20.6)	104	
Intra-abdominal suture material				
Seromuscular suture				
Absorbable	260	31 (11.9)	229	NS
Non-absorbable	570	92 (16.1)	478	
None	91	19 (20.9)	72	
Ligation				
Absorbable	154	16 (10.4)	138	0.047 ^a
Non-absorbable	739	124 (16.8)	615	
None	33	2 (6.1)	31	
Subcutaneous incision				
By surgical knife	120	8 (6.7)	112	0.006
By electric cautery	821	138 (16.8)	683	
Drainage				
No drain	134	18 (13.4)	116	NS
Closed (suction)	132	21 (15.9)	111	
Closed (non-suction)	244	29 (11.9)	215	
Open	431	78 (18.1)	353	
Frequency of glove changes				
None	255	24 (9.4)	231	0.002
One or more	685	122 (17.8)	563	
Subcutaneous suture				
No	741	129 (17.4)	612	0.002
Yes	199	17 (8.5)	182	

Values are expressed as mean ± SD

SSI, surgical site infection

^aAbsorbable versus non-absorbable

relationships were observed between the incidence of SSI and blood loss as well as combined resections. The incidence of SSI was lower when absorbable sutures had been used for abdominal wound closure, seromuscular sutures, and intra-abdominal ligations, than when non-absorbable sutures had been used, although the differences were not significant.

In the lower alimentary tract operations, significant relationships were observed between the incidence of SSI and sex, BMI, smoking status, emergency procedures, wound classification, blood loss, operating time, abdominal wound suture material, seromuscular suture

materials, ligation suture material, combined resection operations, frequency of changing gloves, and the presence of subcutaneous sutures. A higher incidence of SSI was seen in patients who underwent a functional end-to-end anastomosis than in those who underwent an ordinary hand-sewn anastomosis, although the difference was not significant.

The protocol for antibiotic prophylaxis was not fixed, but we investigated it in this surveillance of SSI. Cefazolin was given to 68.3% of the patients who underwent upper alimentary tract operations, and the duration of administering was not longer than 3 days in 88.1%.

Table 4. Characteristics of the patients who underwent upper versus those who underwent lower abdominal operations and their effect on surgical site infection

Characteristics	Upper (n = 312)				Lower (n = 401)			
	No. of patients	SSI (+)	SSI (-)	P	No. of patients	SSI (+)	SSI (-)	P
Age	310	69.8 ± 12	65.8 ± 11	NS	397	66.5 ± 13.2	69.5 ± 12	NS
Sex								
Male	206	19 (9.2)	187	NS	240	56 (23.3)	184	0.026
Female	106	5 (4.7)	101		161	23 (14.3)	138	
BMI	308	22.2 ± 3.6	22.2 ± 3.6	NS	393	22.9 ± 3.3	22.0 ± 3.3	0.025
ASA								
1 and 2	272	18 (6.6)	254	NS	331	65 (19.6)	266	NS
≥3	40	6 (15)	34		70	14 (20)	56	
Comorbidity								
Absent	176	10 (5.7)	166	NS	222	44 (19.8)	178	NS
Present	129	14 (10.9)	115		173	33 (19.1)	140	
Diabetes mellitus	43	3 (7.0)	40	NS ^b	47	9 (19.1)	38	NS ^b
Cardiovascular disease	32	3 (9.4)	29	NS ^b	52	13 (25.0)	39	NS ^b
Lung disease	5	3 (60.0)	2	NS ^b	3	1 (33.3)	2	NS ^b
Renal failure	3	0 (0)	3	NS ^b	9	1 (11.1)	8	NS ^b
Albumin <3 g/dl	11	2 (18.2)	9	NS ^b	20	4 (20.0)	16	NS ^b
Hemoglobin <10 g/dl	13	2 (15.4)	11	NS ^b	50	9 (18.0)	41	NS ^b
Others ^a	24	3 (12.5)	21	NS ^b	49	7 (14.3)	42	NS ^b
Smoking status								
None/cessation ≥ a month	243	17 (7)	226	NS	330	57 (17.2)	273	0.018
Cessation < a month/smoking	68	7 (10.3)	61		67	21 (31.3)	46	
Hair removal								
None	131	11 (8.4)	120	NS	110	17 (15.4)	93	NS
Depilatory agent/clipper	150	10 (6.7)	140		247	50 (20.2)	197	
Razor shaving	9	1 (11.1)	8		14	2 (14.2)	12	

Values are expressed as mean ± SD

SSI, surgical site infection; NS, non-significant

^aOthers include liver cirrhosis or chronic hepatitis, steroid usage, infection, and other diseases

^bVersus comorbidity absent cases

Cefmetazole and flomoxef sodium were given to 44.1% and 28.7% of the patients who underwent lower alimentary tract operations, respectively, and the duration of administering was not longer than 3 days in 77.1%. There was no significant difference in the incidence of SSI according to the type of antibiotics or their duration.

Multivariate Analysis

Gastric surgery, colorectal surgery, and appendectomy (excluding minor operations such as wedge resection, stoma operation, and bypass operations) were analyzed by a multivariate analysis in relation to SSI (Table 6); 48 (6.1%) of the 791 patients were excluded from the analysis because of incomplete data. The type of operation, blood loss, wound classification, emergency procedures, frequency of changing gloves, subcutaneous sutures, combined resection procedures, and the type of seromuscular suture material were identified by multivariate analysis as independent factors influencing the incidence of SSI.

Discussion

The CDC classified postoperative infections as either SSI or remote infection. SSI was further categorized into superficial, deep incisional, and organ/space infection.⁴ These definitions are useful for infection identification and data comparison among hospitals. The CDC guidelines also provided much evidence for specific perioperative management strategies, which have been adopted by surgeons throughout the world. There is considerable evidence that SSI surveillance itself decreases the rate of infection (category IB).^{3,7,8} Therefore, we established our SSI study group and started to perform surveillance to decrease the rate of SSI. We investigated operative procedures such as laparoscopy, methods of closing the abdomen, suture materials, methods of subcutaneous incision, drainage methods, frequency of glove changing, presence of subcutaneous sutures, and anastomotic techniques, in addition to the usual factors included in SSI surveillance.

Our surveillance revealed that the overall incidence of SSI, including post-emergency procedures, was 15.5%

Table 5. Operative variables of upper versus lower abdominal operations and their effect on surgical site infection

Operative variable	Upper (n = 312)				Lower (n = 401)			
	No. of patients	SSI (+)	SSI (-)	P	No. of patients	SSI (+)	SSI (-)	P
Emergency								
Elective	307	20 (6.5)	287	NS	342	61 (17.8)	281	0.024
Emergency	5	4 (80)	1		59	18 (30.5)	41	
Wound classification								
Classes I and II	306	24 (7.8)	282	NS	351	56 (16)	295	<0.0001
Classes III and IV	6	0	6		50	23 (46)	27	
Laparoscopic or assisted surgery								
No	27	0	27	NS	36	8 (22.2)	28	NS
Yes	286	24 (8.4)	262		365	71 (19.5)	294	
Blood loss	312	657 ± 766	334 ± 370	<0.001	397	489 ± 629	224 ± 286	<0.0001
Operation time	307	239 ± 71	240 ± 71	NS	398	222 ± 115	180 ± 73	<0.001
Abdominal wound closure								
Intermittent or continuous								
Intermittent	186	12 (6.5)	162	NS	251	53 (21.1)	198	NS
Continuous	126	12 (9.5)	102		150	26 (17.3)	124	
Suture material					401			
Absorbable	275	19 (6.9)	256	NS	343	61 (17.8)	282	0.019
Non-absorbable	37	5 (13.5)	32		58	18 (31)	40	
Intra-abdominal suture material								
Seromuscular suture								
Absorbable	82	5 (6.1)	77	NS	100	12 (12)	88	0.035 ^a
Non-absorbable	225	19 (8.4)	206		248	54 (21.8)	194	
None	3	0	3		46	10 (21.7)	36	
Ligation								
Absorbable	44	2 (4.5)	42	NS	59	4 (6.8)	55	<0.001 ^a
Non-absorbable	261	22 (8.4)	239		338	74 (21.9)	264	
None	2	0	2		2	0	2	
Combined resection								
No	238	14 (5.9)	224	<0.001	374	67 (17.9)	307	<0.001
Yes	70	10 (14.3)	60		27	12 (44.4)	15	
Subcutaneous incision								
By surgical knife	48	2 (4.5)	46	NS	51	3 (5.9)	48	NS
By electric cautery	264	22 (8.4)	242		350	76 (21.5)	274	
Drainage								
No drain	9	1 (11.1)	8	NS	19	1 (5.3)	18	NS
Closed (suction)	47	4 (8.5)	43		70	14 (20)	56	
Closed (non-suction)	123	9 (7.3)	114		96	17 (17.7)	79	
Open	132	10 (7.6)	122		216	47 (21.8)	169	
Frequency of glove changes								
None	59	5 (8.5)	54	NS	74	6 (22.4)	68	0.009
One or more	253	19 (7.5)	234		326	73 (8.1)	253	
Subcutaneous suture								
No	250	21 (8.4)	229	NS	315	72 (22.9)	243	0.024
Yes	61	3 (4.9)	58		86	7 (8.1)	79	
Functional end to end								
No					333	61 (18.3)	272	NS
Yes					68	18 (26.5)	50	

Numbers in parentheses indicate percentages; values are expressed as mean ± SD

SSI, surgical site infection; NS, non-significant

^a Absorbable versus non-absorbable

and that it was higher following the small-intestinal and colorectal surgical procedures than following gastric surgery. Moreover, univariate analysis revealed that BMI, emergency procedures, wound classification, blood loss, the suture material used for intra-abdominal ligation, the method of subcutaneous incision, the fre-

quency of changing gloves, and the presence of subcutaneous sutures were significantly associated with SSI. Wound classification, emergency procedures, and blood loss were the risk factors most strongly associated with SSI ($P < 0.001$), in accordance with the findings of earlier reports.^{2,9,10} Thus, surgeons should practice all measures

Table 6. Multivariate analysis

Variables	Coefficient	S.E.	Odds ratio	95% CI	P
Operation					
Gastric surgery	0		1.0		0.0003
Colorectal surgery	1.312	0.304	3.71	2.0400–6.7400	
Appendectomy	0.7916	0.64	2.21	0.6280–7.7500	
Blood loss	0.001146	0.000315	1	1.0000–1.0000	0.0007
Wound classification	1.193	0.359	3.3	1.6300–6.6700	0.0021
Emergency	1.217	0.451	3.38	1.3900–8.1800	0.0122
Changing gloves	1.102	0.348	3.01	1.5200–5.9700	0.0033
Subcutaneous suture	-1.091	0.351	0.336	0.1690–0.6690	0.0039
Combined resection					
None	0		1.0		0.0365
One organ	1.088	0.374	2.97	1.4200–6.1900	
Two organs	0.2647	0.731	1.3	0.3110–5.4700	
Seromuscular suture					
None	0		1.0		0.0203
Absorbable	-0.8057	0.457	0.447	0.1820–1.1000	
Non-absorbable	0.8057	0.457	2.24	0.9120–5.4900	

Complete data for 741 patients were analyzed

to avoid contamination of the operative field and minimize blood loss to prevent SSI.

The CDC guidelines⁴ recommend that surgeons minimize devitalized tissue and foreign bodies such as sutures, charred tissue, necrotic debris, and dead space at the surgical site (category IB). Using a surgical knife during subcutaneous incisions can reduce tissue burn and necrosis, which might explain the lower incidence of SSI associated with the use of a surgical knife than with electric cautery. To reduce necrosis and charred tissue in the incisional wound, surgeons should avoid making slow incisions when using electric cautery. The rate of SSI also decreases if subcutaneous tissue is closed with an absorbable suture to eradicate the dead space.¹¹

Less frequent glove changing was associated with a lower incidence of SSI, which may be owing to the procedural background: operative procedures with less contamination such as adhesiolysis and wedge resection do not require glove changing, whereas procedures with more contamination such as colorectal surgery, and stoma operations do require frequent glove changing.

In contrast to upper alimentary tract operations, in which only two factors, namely, blood loss and the additional resection of another organ, were associated with SSI, the patient's sex, smoking habits, operative time, suture material used in both abdominal and seromuscular closure, and the additional resection of another organ were significant univariate factors associated with the incidence of SSI following lower alimentary tract operations. The incidence of SSI was higher when a functional end-to-end anastomosis was performed using suturing instruments¹² than when this technique was not

used. Multifiring of the suturing instrument, which is inserted into the intestinal lumen, might be responsible for the higher SSI incidence. The surgical team must therefore pay careful attention to any type of potential contamination during this procedure.

A preoperative smoking habit was found to be a significant risk factor for SSI following lower alimentary tract surgery, and this tendency was also observed in patients who underwent upper alimentary tract surgery. Hypovolemia and hypoxia are believed to be responsible for SSI.^{2,10} Smoking causes constriction of the peripheral blood vessels,¹³ the possible consequence of which is tissue hypovolemia and hypoxia, creating an environment conducive to SSI.¹⁴ Ideally, patients should refrain from smoking for at least 4 weeks prior to surgery;¹⁵ however, there is usually no time for this, especially when emergency surgery is indicated or the patient has malignant disease. Interestingly, Bluman et al.¹⁶ observed an almost sevenfold increase in postoperative pulmonary complications in smokers who tried to quit smoking prior to surgery in comparison with patients who did not stop smoking. The transient increase in the sputum volume in smokers who stopped smoking several days prior to surgery might be related to this phenomenon.^{17,18} A prophylactic strategy should be established for current smokers who are unable to stop smoking for 4 weeks prior to their operations. According to our surveillance protocol, we focused on the type of suture material used for abdominal wall closure, seromuscular sutures, and intra-abdominal ligations. In Japan, silk is still often used for intra-abdominal suturing and ligation because it is less expensive and easier to handle than absorbable synthetic suture material. However, foreign materials, especially silk, are known to accelerate infection.^{4,19} In